第33回 宝塚混声合唱団音楽会

天地創造

ハイドン

2023年7月29日［土］ 開場 13:15 開演 14:00

豊中市立文化芸術センター ◆後援：宝塚市・宝塚市文化財団・宝塚合唱連盟・兵庫県合唱連盟

ごあいさつ

宝混の名物あつい音楽会にようこそ。第33回は初めての豊中文芸ホールです。少しの緊張と共に精いっぱいうたいます。

聖書に由来するハイドンの「天地創造」、序奏のカオスは、“無”に始まります。ハイドン活躍の時代を追うように、産業革命が18世紀後半の英国から始まり、現在の世界は、人類の活動が地球を覆い尽くしてしまった、文字通りの混沌です。キリスト教を源流とする西欧の思想や制度を、明治以来の私たちは範として来ましたが、気候危機・パンデミック・ウクライナなどは、その西欧中心の価値基準の限界を示しているのかも知れません。

ハイドンは、命が輝く緑の地球を謳っているようです。人と人をつなぐ言葉である音楽。私たちの音楽が混沌の地球にささやかな一筋の光を届けることができるかもしれないと信じて、来場の皆さまとご一緒に、「天地創造」の世界を楽しみたいと思います。

私たちは、手間ひまのかかるまことに贅沢な合唱を、心こめて続けたいと考えています。

本日はご来場ありがとうございます。

2023年7月　　宝塚混声合唱団

「心が踊るハイドンの音楽」

私にとって、シューベルトは漢字一文字で表すと「優」、バッハは「整」、
そしてハイドンは「活」。

モーツァルトを聴くとIQ（Intelligence Quotient・知能指数）が上がると言いますが、ハイドンを聴くとHQが上がるのではないかと感じています。HQとはHuman Quotient・人間性指数のこと。宝塚混声合唱団の天地創造の練習に来る時の気分と、練習を終えて帰る時の気分が違います。疲れるどころか、元気になっています。ハイドンの音楽が、脳の神経細胞に刺激を与えているに違いありません。おそらくハイドン自身のHQ（人間性指数）が高かったと思います。活力に満ち、社会性があり、理性的かつ独創的な生涯であったに違いありません。もちろん、ちゃんとした仕事に就くまでの悩み、宮廷楽長としての宮仕えの苦労、妻との不和…等々、人並みの苦悩はあったでしょうが。

オラトリオ「天地創造」は還暦を過ぎたハイドンが3年もの年月をかけ、66歳の時完成させました。
今から225年前、1798年のこと。シューベルトはまだ一歳の赤ちゃん。
作曲のきっかけは、ヘンデルの「メサイア」を聴いて心が躍った、とか。

合唱団の練習から本番までのプロセスは、一つの世界遺産をゆっくり時間をかけて、隅々まで探訪しているようなもの。このプロセスはメンバーの脳神経細胞にとっては、最高の刺激（栄養）になっています。楽しく元気に過ごす為に、私達は歌います。そしてそのことが心が踊る社会につながる事を信じています。

指揮者　畑 儀文

第32回　宝塚混声合唱団音楽会　バッハ「クリスマス・オラトリオ」 2022年8月20日　東リいたみホール

プログラム

ハイドン「天地創造」

指揮者　畑 儀文 によるプレトーク

第1部　第1曲 – 第13曲

―― 休憩 ――

第2部　第14曲 – 第28曲

第3部　第29曲 – 第34曲

指揮　畑 儀文

ソプラノ　松原 みなみ

テノール　松原 友

バス　篠部 信宏

オーケストラ　アンサンブル・ムジカ・アニマ

字幕システム　合同会社ミチヤシステムズ
（藤野 明子 訳）

曲目紹介

第1部：第1曲 – 第13曲

第1日

第1曲	ラルゴ：混沌の描写	
	レチタティーヴォ（ラファエル）と合唱	はじめに神は天と地を創造（つく）られた
第2曲	アリア（ウリエル）と合唱	いまや聖なる光の前に、暗黒の闇の灰色の影は消えうせ

第2日

第3曲	レチタティーヴォ（ラファエル）	神は大空を造り
第4曲	ソプラノ独唱（ガブリエル）と合唱	喜ばしき天使たちの群れは驚きをもって

第3日

第5曲	レチタティーヴォ（ラファエル）	神はまた言われた「天の下の水は一つ所に集まり」
第6曲	アリア（ラファエル）	泡立つ波を轟かせて
第7曲	レチタティーヴォ（ガブリエル）	また神は言われた「地に青草と」
第8曲	アリア（ガブリエル）	いまや野は爽やかな緑をさしいだして
第9曲	レチタティーヴォ（ウリエル）	やがて天使たちの軍勢が、第3日を告げ知らせ
第10曲	合唱	弦の調べを合わせよ

第4日

第11曲	レチタティーヴォ（ウリエル）	神は言われた「天に光があって昼と夜を分け」
第12曲	レチタティーヴォ（ウリエル）	いまや輝きに満ちて、陽は光を放ちながら昇る
第13曲	独唱（ガブリエル、ウリエル、ラファエル）と合唱	天は神の栄光をあらわし

第 2 部：第 14 曲 – 第 28 曲

第 5 日

第 14 曲	レチタティーヴォ（ガブリエル）	神はまた言われた「水は生きものの群に満ち」
第 15 曲	アリア（ガブリエル）	力強い翼を広げて
第 16 曲	レチタティーヴォ（ラファエル）	神は大きな鯨と全ての動く生き物をつくり
第 17 曲	レチタティーヴォ（ラファエル）	やがて天使たちは彼らの不滅の竪琴を奏で
第 18 曲	三重唱（ガブリエル、ウリエル、ラファエル）	若々しき緑に飾られて
第 19 曲	三重唱（ガブリエル、ウリエル、ラファエル）と合唱	主は、その御力によりて大いなり

第 6 日

第20曲	レチタティーヴォ（ラファエル）	神はまた言われた「地はさまざまな生きものを産み出せ」
第 21 曲	レチタティーヴォ（ラファエル）	大地は直ちにその胎を開き
第 22 曲	アリア（ラファエル）	いまや天は光に溢れて輝き
第 23 曲	レチタティーヴォ（ウリエル）	そこで神は、その御姿に従って人間をつくられた
第 24 曲	アリア（ウリエル）	威厳と気高さを身につけ
第 25 曲	レチタティーヴォ（ラファエル）	そこで神が、作られた全てのものを見られたところ
第 26 曲	合唱	大いなる御業は成りぬ
第 27 曲	三重唱（ガブリエル、ウリエル、ラファエル）	おお主よ、全てのものはあなたを仰ぎ見
第 28 曲	合唱	大いなる御業は成りぬ

第 3 部：第 29 曲 – 第 34 曲

第 29 曲	ラルゴ：レチタティーヴォ（ウリエル）	薔薇色の雲を破り
第 30 曲	二重唱（アダム、イブ）と合唱	おお主なる神よ
第 31 曲	レチタティーヴォ（アダム、イヴ）	我らは創造主に感謝を捧げ
第 32 曲	二重唱（アダム、イヴ）	優しき妻よ、お前の傍らにあれば
第33曲	レチタティーヴォ（ウリエル）	おお幸いなる夫婦よ
第 34 曲	終結合唱	全ての声よ、主に向かって歌え！

［出典］Wikipedia　　編集：宝塚混声合唱団・音楽会運営部

ハイドン「天地創造」解説

ハイドンの生涯

フランツ・ヨーゼフ・ハイドンは女帝マリア・テレジアとその息子ヨーゼフ2世治世下のオーストリアで宮廷音楽家として、そして市民音楽の形成者として百を超える交響曲、八十余の弦楽四重奏曲、オラトリオ「天地創造」「四季」などを生み出したヨーロッパ古典派音楽の重鎮です。1732年にウィーン東方の小邑ローラウで車大工の息子として生まれたハイドンは幼少の頃から音楽的素質にめぐまれ、8歳のときウィーンのシュテファン寺院の少年合唱隊（いまのウィーン少年合唱団）に加わり10年後声変わりで合唱隊を去ってからは市中の屋根裏部屋に住んで、貴族の子女の音楽の家庭教師をしながら独学で作曲や楽器演奏の腕を磨きました。1761年にハンガリー貴族エステルハージ家に召し抱えられ、アイゼンシュタットに赴いて楽長を勤め楽団のため多くの器楽曲やミサ曲を作曲して年々盛名が高まりました。“パパ・ハイドン”の愛称で呼ばれたようにハイドンは温厚で礼儀正しく生涯を通じて敬虔なカトリック信者でしたが、唯一の不幸は年上で音楽を理解しない女性アンナと結婚したことで、二人は子供にめぐまれないまま添い遂げましたが、美しい年下のイタリア人女性歌手ボルツェリがハイドンに“愛の彩り”を与えたと伝えられています。1790年、エステルハージ公の死去に伴う楽団の解散によってウィーンに戻ったハイドンは音楽興行師ザロモンの斡旋でイギリスに招かれ、1795年までロンドンとウィーンを往復する生活を過ごしました。音楽が市民の間で広く享受されるようになっていたイギリスでは次々に演奏会での指揮や新作の演奏を求められ、名声と富を得てオクスフォード大学から名誉博士号を授かりました。交響曲「驚愕」「軍隊」「時計」、弦楽四重奏曲「皇帝」などの人気曲はこの時期に作られたもので、ちなみに「皇帝」は英国国歌に着想を得て作曲され荘重な旋律は現在もドイツ国歌として歌い継がれています。1795年にウィーンに帰ったハイドンは市内のグンペンドルフに居を構え、ロンドン滞在中に聴いたヘンデルの「メサイア」に強い刺激を受けてオラトリオ「天地創造」「四季」を書き、1809年にナポレオンのフランス軍が侵入した直後に老衰のため77歳の生涯を閉じました。葬儀はショッテン教会で行われ、集ったウィーン市民たちはモーツァルトの「レクイエム」を歌って追悼しました。

天地創造の成り立ち

晩年のハイドンは声楽曲の作曲に力を注ぐようになり、1796年にカンタータ「十字架上のキリストの最後の七つの言葉」で好評を得た後、これまで培った全芸術性を総合してオラトリオ「天地創造」の自主制作に着手しました。台詞は友人のスヴィーテン男爵が英語から翻案したドイツ語によるもので、旧約聖書の「創世記」とイギリスの文豪ジョン・ミルトンの長詩「失楽園」が土台となっております。曲は3部に分かれ、第1部と第2部は旧約聖書に描かれた天地創造の物語が天使によって語られ、第3部はアダムとイヴの純愛が題材となっています。「創世記」では神による天地の創造は1日目に天と地、昼と夜が分けられ、2日に空、3日に大地と海と植物、4日に太陽と月と星、5日に魚と鳥、6日に獣と人間が生まれ、7日は休日となっていますが、ハイドンの曲では暗闇から光が生まれ天地と水と植物が誕生する1日から4日までを第1部、動物と人間が誕生する5日と6日を第2部とし、その模様を“混沌と秩序、雷鳴と電光、雨雪、海と小川、日の出と月光、草木と虫魚、畜獣と人間”と対照的、音画的に描写表現し、第3部では禁断の木の実を食べる以前のエデンの園での男女の幸せと神への讃美が語られます。

舞台はオーケストラ、3人のソリスト（ガブリエル：ソプラノ、ウリエル：テノール、ラファエル：バリ

トンが第1部、第2部では天使を歌い、第3部ではソプラノがイヴ、バリトンがアダムを歌う)、そして混声4部合唱から構成されています。全曲は1797年に完成され、推敲を経て翌1798年4月にシュヴァルツェンベルク宮殿での試演により大きな反響を呼び、1799年3月には67歳のハイドン自身の指揮によりブルク劇場で公開初演が行われ劇的な成功を収めました。

曲数は第1部13曲、第2部15曲、第3部6曲、合計34曲より成り立っており、オーケストラ、独唱、重唱、合唱が協調し、和声法と対位法の統合による力強い旋律展開と鮮明な描写表現はハイドン音楽の総決算であり古典派音楽を代表する傑作として不動の価値を誇っております。

天地創造の概要

第1部、第2部は3人のソリストによるレチタティーヴォ、アリアと合唱、オーケストラが秩序を保ちながら日毎に神による“創造”の営みが進んで行きます。1日目は“混沌”を現わすオーケストラの漂うような序奏に始まって、ラファエルが天地の分割を告げると、合唱が“光”の創造を歌い(第1曲、以下数字で表す)、続いてウリエルが合唱を伴いながら秩序ある世界の出現を歌います(2)。2日目は大地と水の区分をラファエルが告げ、オーケストラが天地の鳴動を描写し(3)、ガブリエルが合唱と共に神の御業を讃えます(4)。3日目はラファエルが海陸の区分と山河の情景を器楽の伴奏でオペラ風に歌う(5、6)と、ガブリエルが草木の創造を木管の響きと共にコロラトゥーラで彩り豊かに歌い(7、8)、ウリエルの短いソロ(9)を挟んで合唱が高らかに神への讃歌を唱えます(10)。4日目はウリエルが器楽の伴奏と共に太陽と月と星の出現を語ります(11、12)。続く独唱付き合唱“天は神の栄光をあらわし”はハ長調の力強い曲で単独の合唱曲としてもよく取り上げられる有名な曲です(13)。

第2部

5日目はガブリエルが空の鳥の誕生を技巧を凝らして歌い(14、15)、ラファエルが海の生物の創造を祝福し(16、17)、続いて三天使が交互に自然の恵みを歌って神を讃え(18)、合唱と三重唱が全能で永遠なる神を力強く讃美します(19)。6日目はラファエルが陸の生物の誕生を告げると(20)、オーケストラの音色が種々の動物の姿をいきいきと描きだし(21)、神の慈しみを湛えた人間の誕生を望むと(22)、ウリエルが神の姿に似た人間男女の創造を告げ、アダムに寄り添うイヴの無辜な姿を歌います(23、24)。ラファエルが創造の成就を寿ぐ(25)と、それを讃える合唱“大いなる御業は成りぬ”(26)が神の威力を讃える魅力的な三重唱(27)に先がけて歌われ、さらに合唱が壮大なフーガに発展しハレルヤを繰り返して第2部を締めくくります(28)。

第3部

エデンの園の雰囲気を表すフルートの序奏で始まり、ウリエルが楽園を歩くアダムとイヴの姿を語ると(29)、二人は共に幸せの思いに浸りつつ、合唱と交互に神への限りない感謝と信仰を歌います(30)。二人は互いの絆の強さを確かめ、伴侶となることを誓いあい(31)、その気持ちを優美な二重唱で歌い上げます(32)。ウリエルが二人に過ちがないよう祈願し祝福すると(33)、最後の合唱“全ての声よ、主にむかって歌え!”がホモフォニックに立ち上がり、ソリスト3人が加わって荘重なフーガへと展開され、主の御業を讃えるなかで力強いアーメンの絶唱で全曲が結ばれます(34)。

畑儀文先生を指揮者にお迎えして丁度10年。ハイドンのオラトリオ「四季」を皮切りに、ベートーヴェン「荘厳ミサ」、ヴェルディ「レクイエム」、ブラームス「ドイツ・レクイエム」、ドヴォルザーク「レクイエム」、ヘンデル「メサイア」、バッハ「クリスマス・オラトリオ」と大曲に取り組んでまいりました。遷延したパンデミックからの脱出もようやく展望できるようになった今夏、再びハイドンに立ち返って心躍る名曲「天地創造」を演奏できる幸せを噛みしめ、“天地・人心の再生”への意を込めながら、ソリスト、オーケストラの皆さまと力を合わせて精一杯歌わせていただきます。

(参考文献)
「新版・ハイドン」 大宮真琴 音楽之友社
「ハイドン」 ひのまどか リブリオ出版
「音楽の都ウィーンの誕生」 G・グローマー 岩波書店

(テナー 福田 伸)

Profile

指揮
畑 儀文　はた よしふみ

兵庫県丹波篠山市生まれ。大阪音楽大学大学院修了。

1979年大阪にて、小林道夫氏の伴奏による初リサイタルを行う。以後テノールソリストとして、ドレスデン国立歌劇場管弦楽団ホルン奏者ペーター・ダム氏との共演、イエルク・デームス氏の伴奏による数多くのリサイタル等で大きな成果をおさめた。1991年オランダ・アムステルダムにおいて、バロック歌手として高名なマックス・ファン・エグモント氏のもとで研鑽を積む。以後オランダ各地において、受難週には、エヴァンゲリストとして招かれ、近年はドイツ・ライプツィヒにおいてバッハ作品のソロを務める。また1993年～ 1999年にかけて、シューベルト歌曲全曲演奏を成し遂げ、国内外で話題を集めた。2017年3月大阪バッハ合唱団オランダ、ドイツツアーでは「マタイ受難曲」の指揮者、エヴァンゲリストとして演奏会を成功に導いた。

今年1月にはシューベルト弾き歌いシリーズ第6弾としてフォルテピアノによる歌曲集「冬の旅」に挑み好評を得た。日本コロムビアからCD「日本のうた」「新しい日本のうた」「トスティ歌曲集」「昭和のうた」「美しき水車小屋の娘」、エール株式会社から「こどものこころ」「日本のこころ」をリリースし、その天性の歌声はジャンルを問わず心に響く感動を呼び、注目を集めている。

「大阪文化祭本賞」「咲くやこの花賞」「大阪府民劇場賞」「坂井時忠音楽賞」「兵庫県芸術奨励賞」「兵庫県文化賞」等多数の賞を受賞。丹波の森国際音楽祭シューベルティアーデたんば音楽監督。京都女子大学非常勤講師。

ソプラノ
松原 みなみ　まつばら みなみ

大阪府出身。大阪府立夕陽丘高等学校音楽科卒業。東京藝術大学音楽学部声楽科、同大学大学院音楽研究科修士課程（独唱）、博士後期課程（独唱）修了。博士号（音楽）を取得。同声会賞、アカンサス賞、武藤舞賞、三菱地所賞受賞。ウィーン国立音楽大学オペラ科を審査員満場一致の首席（最優秀）で修了。現在東京藝術大学音楽学部声楽科教育研究助手。

ヤマハ音楽奨学生。明治安田クオリティオブライフ文化財団海外音楽研修生。第22回友愛ドイツ歌曲コンクール奨励賞受賞（学生の部最高位）。第24回友愛ドイツ歌曲コンクール一般の部第二位ならびに、日本歌曲賞受賞。Jan Kiepura国際声楽コンクールR.シュトラウス賞受賞。Ljuba Welitsch国際声楽コンクール特別賞受賞。第26回コンセル・マロニエ21第三位。第91回日本音楽コンクール声楽部門（歌曲）第一位、ならびに木下賞、畑中賞、E.ナカミチ賞受賞。

声楽を恩知理加、佐々木典子、A.Scharinger、A.Carangelo、菅英三子の各氏に師事。

テノール

松原 友　まつばら とも

photo:Yoshinobu Fukaya

東京藝術大学卒業。同大学院修了。ロームミュージックファンデーション、野村財団奨学生としてミュンヘン音楽大学大学院、ウィーン国立音楽大学リート・オラトリオ科卒業。

第14回松方ホール音楽賞、第81回、83回日本音楽コンクール第3位・岩谷賞（聴衆賞）、第71回文化庁芸術祭新人賞受賞。

これまでヨーロッパ、日本各地でのリサイタル、オペラ、オラトリオの公演をはじめ、ＮＨＫリサイタルノヴァ、ルールトリエンナーレ、トビリシ音楽祭、小澤征爾音楽塾、サイトウキネンフェスティバル、ＰＭＦ音楽祭等に出演。小澤征爾、ウルフ・シルマー、準・メルクル、インゴ・メッツマッハー、ハルトムート・ヘンヒェン、山田和樹他、国際的な指揮者と共演を重ねる。

東京藝術大学、京都市立芸術大学、武蔵野音楽大学、同志社女子大学、相愛大学、大阪音楽大学、大阪教育大学、夕陽丘高校、相愛高校、各非常勤講師。東京二期会会員。

バス

篠部 信宏　しのべ のぶひろ

大阪芸術大学大学院修了。卒業時に学長賞受賞。第１回大阪国際音楽コンクール声楽部門第３位受賞。

2009年丹波の森国際音楽祭のシンボルアーティスト。2005年より毎年渡欧Max van Egmond氏に師事。2017年3月オランダにてバッハ「マタイ受難曲」のイエスを、ドイツにて同曲のバスアリアを歌いバーディシェ新聞紙上で絶賛される。2019年11月ドイツ、アイゼナハバッハ音楽祭にて「ロ短調ミサ」のソロを務めた。宗教曲のソリストとして日本テレマン協会定期、大阪フィルハーモニー交響楽団いずみホール特別公演、関西フィルハーモニー管弦楽団定期等に出演。

バッハ「マタイ受難曲」「ヨハネ受難曲」「ロ短調ミサ」「クリスマスオラトリオ」全てのバスソロカンタータを含む「教会カンタータ」、ヘンデル「メサイア」、モーツァルト、フォーレ、ブラームスの各「レクイエム」、ベートーヴェン「第九」「荘厳ミサ」他多数の作品を歌い高い評価を得ている。

現在、シノベムジクアカデミー代表、京都バッハゾリステン所属、京都ゲヴァントハウス合唱団音楽顧問、日本テレマン協会ソリスト、京都女子大学、大阪芸術大学非常勤講師。

チェロ

上塚 憲一　かみづか けんいち

京都市立芸術大学卒業。チェロを黒沼俊夫、A.ビルスマ、室内楽をG. ボッセ、S. スタンデイジの各氏に師事。大阪文化祭奨励賞、灘ライオンズクラブ賞、坂井時忠音楽賞を受賞。大阪音楽大学教授、同大学付属音楽院講師、西宮高等学校音楽科非常勤講師。チェロ・アンサンブル・エクラ、Baroque Ensemble VOC、アンサンブル・ムジカ・アニマを主宰。ソロ活動のほか、室内楽では播磨室内合奏団（2015年結成）に参加し、自身でも旧テレマン・アンサンブルメンバーの再活動の場としてザ･リターンズ･コンソートを結成した。指揮活動としては、ジョワン（オルケストル･クラシーク･ド・ジョワン / アンサンブル・ジョワン）、チェロ・アンサンブルKobe、アンサンブル・オルタンシア・神戸の音楽監督や指揮者として活動し、地域の活動として明石フィルハーモニー管弦楽団演奏委員、同管弦楽団運営副本部長、同ジュニア・オーケストラ常任トレーナーとして活動している。西宮音楽協会会員。

バイオリン

釋 伸司　しゃくしんじ

京都市立芸術大学卒業。元テレマン室内管弦楽団コンサートマスター。現在は、いずみシンフォニエッタ大阪、マイハート弦楽四重奏団メンバー。京都フィルハーモニー室内合奏団客演コンサートマスター。室内アンサンブル・アッサンブラージュを主宰し、ホール主催公演、学校公演レコーディングなど幅広く活躍している。神戸女学院非常勤講師、岡山フィル首席奏者。アンサンブル・ムジカ・アニマコンサートマスター。アマービレフィルハーモニー管弦楽団客演コンサートマスター。

オーケストラ

アンサンブル・ムジカ・アニマ

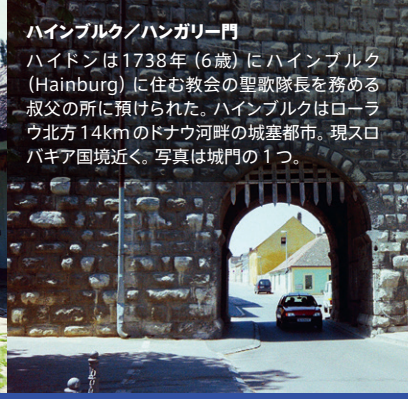
2006年上塚憲一を中心に発足したオーケストラで、主に関西で活躍する経験と実力豊かな演奏家を中心に構成される。個々の演奏家のレベルの高さから、時代考証に基づいた正統派の演奏を目指す完成度の高いオーケストラで、バロックから近代の合唱作品での演奏は共演した各方面より高い評価を得ている。宝塚混声合唱団とは、2007年の第19回音楽会以来、共演を努めさせていただいている。

ローラウ／ハイドンの生家 1

フランツ・ヨーゼフ・ハイドンは、1732年にオーストリアの東端のローラウ（Rohlau）で生まれた。ハイドンの生家は、火事で焼失後もとの形に再建され、現在はハイドン博物館になっている。

ローラウ／ハイドンの生家 2

生家の中庭の様子。わら葺き屋根、井戸の跡など当時の様子が偲ばれる。



ハインブルク／ハンガリー門

ハイドンは1738年（6歳）にハインブルク（Hainburg）に住む教会の聖歌隊長を務める叔父の所に預けられた。ハインブルクはローラウ北方14kmのドナウ河畔の城塞都市。現スロバキア国境近く。写真は城門の１つ。

ハイドン写真館

バス・大隅氏による８回目の写真館です。今回はハイドンの生涯と「天地創造」を紹介します。
写真館でどうぞおくつろぎ下さい。初登場、テノール・山本氏の写真も紹介しています。（音楽会運営部）

アイゼンシュタット／エステルハージ宮殿

ハイドンは1761年（29歳）の時、アイゼンシュタット（Eisenstadt）に移った。エステルハージ（Esterhazy）家に1790年（58歳）までの約30年間仕え、ここで数々の名作が生まれた。アイゼンシュタットはウィーンの南約50km、現ハンガリー国境近くにある。写真はバロック風の宮殿。

フェルテード／エステルハージ宮殿

ハンガリー西部に位置する町フェルテード（Fertőd）にあるエステルハージの宮殿。ウィーンのシェーンブルン宮殿を模したともいわれる。交響曲第45番「告別」のエピソードで有名。

ウィーン／ハイドンハウス 1

ハイドンはこの家で「天地創造」「四季」等を作曲した。

ロンドン／ウェストミンスター寺院

ハイドンは1791年から95年の間にロンドンに２回滞在。当時ロンドンではヘンデルのオラトリオが盛んに上演され、ハイドンは強く感銘を受けた。同寺院で演奏されたメサイアの出演者数をメモしたともいう。

ハイドンのデスマスク

ハイドンハウス内の展示。ハイドンはナポレオン戦争中の1809年に77歳で世を去った。遺体はアイゼンシュタット市内の墓地に葬られている。

晩年のハイドン

ハイドンハウス内の展示。ハイドンは60歳を過ぎても創作意欲は衰えることはなかった。後期６大ミサ、「天地創造」「四季」はいずれも1796 ～ 1802年（64 ～ 70歳）の作曲。

ウィーン／シュテファン寺院

ハイドンは1740年（8歳）に首都ウィーンに行き、1761年（29歳）までの約20年間を首都で過ごした。このウィーン時代の前半はシュテファン寺院で聖歌隊員として歌い、後半は作曲家としての本格的な修行を行った。

ウィーン／オペラ座

音楽の都の象徴であるオペラ座はハイドンの死後1869年の完成。「天地創造」の初演（1799年）はブルク劇場。

ウィーン／ハイドンハウス2

ハイドンのロンドン旅行中、妻のマリア・アンナ・アロイジアが探していたこの家を気に入り、1893年に購入。改築もして1809年に亡くなるまでこの家で作曲活動を続けた。彼女は悪妻との説があるが果たして。。。

ウィーン／ハイドンハウス3

ロンドンからウィーンに戻ってからのハイドン最後の家。現在はハイドン博物館となっている。後にブラームスもこの家に住んでおり、博物館内にはブラームス記念館もある。

ファラースレーベン（ドイツ国歌作詞者）の胸像

今のドイツ国歌は、ハイドンが作曲した弦楽四重奏曲「皇帝」第2楽章の主題に、ドイツの文学者で詩人のホフマン・フォン・ファラースレーベンが「ドイツの歌」という詩をつけたもの。ファラースレーベンは地名で、現在VW本社のあるヴォルフスブルクの一部。

東京駅の「天地創造」

「天地創造」の主題は、音楽、絵画だけでなく、映画、ゲームソフトなど色々なジャンルにある。この写真はJR東京駅京葉線連絡通路の壁面にあるステンドグラス。洋画家・福沢一郎のパブリックアート作品（1972年完成）。